

対照言語行動学研究会（JACSLA）第 20 回記念大会 研究発表 概要

2022. 10. 8 開催 於 神奈川大学 みなとみらいキャンパス

タイトル	「時間が時間だから」構文の意味と使用
著者名（所属）	氏家啓吾（東京大学大学院）
連絡先 E メール	keigo5525[@]gmail.com
発表内容	<p>本発表では、次のような日本語の同じ名詞（句）が二度生起したコピュラ文「X が X だ」を取り上げ、この構文の意味と使い方を考察した。</p> <p>(1) 時間が時間だから、電話するのはやめておこう。</p> <p>(2) 太郎は年齢が年齢だから、なかなか職が見つからないようだ。</p> <p>この表現は日本語において慣習的な構文（construction）の一つとなっている。先行研究においては、主に理由節・条件節で用いられること、マイナス評価への偏りが見られること、コピュラ文の分類で「同定文」に属することなどが指摘されている（森山 1989、久保 1992、Okamoto 1993）。</p> <p>先行研究の検討と実例の観察を通して、以下のことを主張した。まず、(i) 「X が X だ」に生起する名詞 X はフレーム（Fillmore 1982）の一要素を表す名詞である。例えば、「時間」「場所」「年齢」「相手」「値段」などの名詞が頻繁に現れ、逆に固有名詞は現れない。そして、(ii) この構文の使用は、「X が X だ」の表す内容を聞き手が既に知っていると話し手が想定していることを暗に伝える。例えば「太郎は年齢が年齢だ」と言うとき、太郎の年齢が高いと聞き手が既に知っていると話し手は想定している。さらに、(iii) 「X が X だ」の表す内容が、既知であるにもかかわらず発話において有意義な貢献をなすのは、それが別の話題に対して何らかの帰結をもたらすためである。理由・条件に用いられやすいことはこれにより説明される。つまり、この構文「X が X だ（から、P）」を使う話し手は、話題の人や事物に関して「フレーム要素 X の値は何か」という問いを提起しつつも答えを明示しないのと同時に、その暗黙の答えが別の話題に対し帰結を持つと示している。この二重構造が構文の意味に含まれていると考えられる。この議論を通して、言語表現の意味は使用の状況・文脈や聞き手の知識の想定から切り離せないとする使用基盤モデル（Langacker 2000）に基づいて日本語の構文を記述することの有効性を示した。</p> <p>質疑応答においては、フレーム概念による説明が先行研究の説明といかなる関係にあるのか、また、今回扱った現象が各言語の同語反復文の意味的な普遍性と個別性の議論に対してどのような示唆をもたらすのかといったさらなる課題が提起された。</p>
参考文献	<p>Fillmore, Charles J. (1982) Frame semantics. In: Linguistic Society of Korea (ed.) Linguistics in the Morning Calm, 111–138, Seoul: Hanshin.</p> <p>久保智之 (1992) 「日本語の同語反復コピュラ文に関する覚え書き—「時間は時間だ」と「時間が時間だ」—」『福岡教育大学国語科研究論集』33: 44–56.</p> <p>Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. In: Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.) Usage-based models of language, 1–63. Stanford: CSLI Publications.</p> <p>森山卓郎 (1989) 「自同表現をめぐって」『待兼山論叢 日本学篇』23: 1–13.</p> <p>Okamoto, Shigeko (1993) Nominal repetitive constructions in Japanese: The 'tautology' controversy revisited. Journal of Pragmatics, 20 (5), 433–466.</p>

